

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520367

研究課題名(和文) 中華民国の文芸政策と少年雑誌の関係についての研究－『幼獅少年』の創刊と展開

研究課題名(英文) The Policy about Literature in R.O.C. and the Magazine for Youth

研究代表者

高橋 明郎 (TAKAHASHI, AKIO)

香川大学・経済学部・教授

研究者番号：60197126

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：中国国民党の関係組織である救国団が義務教育化で誕生した国民中学生を対象とした雑誌が『幼獅少年』である。バックナンバー調査や、救国団支部雑誌編集長、学校関係者の面接調査から、この雑誌が初期において当時の政府・教育部・新聞局の期待する中学生像(中華民国の価値の認識、中華文化の知識・愛着、先人への畏敬、文化を破壊する共産党の誤りを認識、正しい国語を使える、大陸を解放する責任があることを理解している)構築にほぼ対応した構成になっていること、本誌創刊初期に刊行が始まる国民中学の校刊誌に形態上影響していることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)： "Youth Jevvenile" is the magazine, which was published by China Youth Corps for New Junior High School tudents. I investigated backnumbers and did interviews with the editor of C.Y.C at Tainan City branch. Then we can know that the magazine roughly corresponds to the image of "ideal junior high school students", who recognize the value of R.O.C., the superiority of Chinese Culuture, the fault of C.P.C., aware of the responsibility for free people in China, and are able to use the correct Chinese.

And the format of this magazine had a effect on the other magazine's form, which published by junior high school in the "Youth Jevvenile" early period.

研究分野：台湾文学

キーワード：幼獅少年 救国団 校誌 台湾少年雑誌

1. 研究開始当初の背景

中華民国が台湾に移ってから、国民のアイデンティティー構築と政策の国民への周知のため教育・文化面で利用されたのは、主として国語教育、宣伝教材としての芸術作品がある。

(1) 出版制限の時期に、国民党関係の組織である救国団は、大学など高等教育機関の学生世代を念頭に『幼獅』の刊行を開始した。当初は時事解説、論文に加え小説も含む総合誌であったが、やがて文芸作品を発表する機能は、『幼獅文芸』の刊行開始とともにそちらにほぼ移行した。これ以後『幼獅』は、論文を主したり校園紹介にも紙幅を割いたり何回か編集傾向が変化するが、読者層の知的水準がある程度確保されているため、政府の方針や時事分析によって中華民国政府の正当性や反共の主張、中華文化の価値の解説など扱う論文・記事を掲載して直接読者層に伝達した。

(2) 一方『幼獅文芸』は文芸作品提供の場を提供するとともに、関連行事として文学営を運営し、次世代作家教育機能を持たせた。この点については赤松美和子による専著が近年公刊された。

上記二者は、いずれも想定する読者層は青年以上であり、(2)の作者たちも同様であった。一方これより下の年代については、文芸面では『国語日報』と若干の少年読み物雑誌があり、また少年層の作品掲載として新聞の副刊が存在したが、(1)のような機能は、当然読者年齢の理解力に合わせるために希薄である。しかし民國65年になって救国団は『幼獅少年』の刊行を開始した。この雑誌は、今日でも刊行が続いているが、そもそも救国団はこれによって何を機能として期待したか、読者に何を提供したかは研究開始時点で未整理状態であった。

既に民主化の進んだ今日の台湾では、所謂「光復」後「解戒」に至るまでの多くの資料が公開されたこともあり、政治史、戦後台湾文学史、台湾教育史など基礎的な研究は既に数多くなされている。また文芸についても、特に国語日報に発表された諸作品や、そこで活躍した作家達の研究は比較的進んでいる。

しかし、政策的に利用されやすい「幼獅」など青少年向け雑誌の変質の調査・分析は未だしい。台湾の対青少年政治教育政策と、それに応じるよう努力する作者たちの活動をたどることで、第二次大戦後の文芸活動の側面を考究できると考えられる。

またその結果は、たとえば日本の敗戦までの、少年雑誌の国策高揚の編修と比較するとき、雑誌の青少年感化の影響力についても示

唆を与えてくれるはずである。

2. 研究の目的

国民政府が、接收した台湾をどのように教化しようとしたかは、本土化の時期の前も幾つかの段階に分けて考える必要がある。第一段階は旧統治者であった日本の影響力を極力排し、中国にアイデンティティーを持たせること、第2段階は共産主義を否定すること、第3段階は、事実上大陸反攻が難しくなる一方大陸での伝統の中国文化の破壊が進み、中国文化の担い手の自覚を求めることである。

青少年の教化は、直接には教育制度という枠を決めて行われたが、この研究では、観察の対象として『幼獅少年』を設定した。救国団発行の『幼獅少年』の編集の変遷から、中華民国政府の政策への少年雑誌の対応と機能について考察する。

戒厳令下とはいえ、既に中華民国の世界的影響力が次第次第に低下していく方向が、少なくとも政府には予測できる時代であって、政治的な話はあまり多くなく、冒頭記した第3段階に属して、むしろ少数民族を含めて、実際に中華民国統治下にある国民の一体感醸成に主点があるように感じられる。それでも総統の文章などが掲載されたりする雑誌であった。つまり、基本的に台湾を含む一つの中国(中華民国)という意識の下で、大陸出身者に大陸の文化伝統などを紹介させ、あるいは大陸での少年期を回想させることを編集の一つの柱としていたのは間違いない。しかし、一方、雑誌で紹介できる行事や、作品を掲載できる少年少女たちは、当然ながら島内生活者で、せいぜい華僑を含めることができる程度の範囲であった。この雑誌は兩岸分離が固定化しつつある情勢を無視できない所から出発していたと言える。

編集の姿勢を分析することで、こうした雑誌を通じて何を少年に伝達することを目的としたかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 資料収集

『幼獅少年』の創刊以来の目次資料を調査し、主要記事を複写のうえ整理分類する。

(2) 上で作成した執筆者リスト、記事分類表をもとに、初期の編集の特徴を考察するとともに、起用された作家関係の資料を収集する。

(3) 平成25年度は、台南の国立成功大学客員研究員として活動することになったため、上記調査の重点を減じて、以下の調査に切り替えた。台南で救国団が発行している『南市青年』の収集や編集者への面接調査、『幼獅少年』と前後して刊行が多くなった国民中学、高級中学の校誌を調査し指導教員の聞き取り調査を行った。これは『幼獅少年』の有していた機能、読者である少年層の作品を掲載することと、中高生へのメッセージ伝達の面での対照例とするためである。

4. 研究成果

[研究成果]

4 本の論文で、創刊期の時代背景、創刊期(1~5号)の記事構成と執筆者の分類、創刊5年後の記事構成の特徴、読者である中学生に対する教育部の措置や、『幼獅少年』以外の当時の刊行物の機能について公刊したものを、下に総合的に記述する。

(1) 創刊期・初期に教育部が指導してきたことは、新たに義務教育化された国民中学を含め小学校入学から高等教育に至る一貫した、三民主義教育、民族精神教育の強化であり、確実に義務教育下に9年間ほぼすべての児童生徒を拘束しておける時期は、この意味で有効な手段であった。

一般的な学力以外に読者層である中学生に求められた能力は、『教育部広報』から読み解けば

A 中華民国の十分な知識とその価値の認識
B 中華文化の知識とそれへの愛着 C 中国の先人の偉大な業績に触れ誇りを持つ D 正しい国語を使える E 伝統的な価値ある文化や文字を破壊する共産党の誤りを認識している F 中華国民は共産党政権下で苦しむ大陸の人々を解放する責任があることを理解している

ということである。

このために実施された施策は 各自治体は研修会を企画して各科教員の教育法改善、教孝月教育の推進、伝統的倫理を教授し愛国心を高め、また反共の心を持たせる、校内集会で中華文化を宣揚する、国父記念館、故宮博物院、中正紀念堂などの見学、軍事学校への進学奨励、中小教師の自強愛国座談会、国語使用推進に加え、指導者の広報も行われた。

教孝月制定は、実際に学校では蒋介石事跡の解説や、蔣経国の「梅台思親」「守父靈一月記」などの心得募集や試験、加えて雑誌に、特集記事を要請した。

(2) 創刊期・初期に雑誌出版物全般に対して行われたこと及び執筆側の状況は、

『幼獅少年』発刊の時期民國65(1976)年前後は、雑誌の規制強化の時期である。「加強雑誌管理執行要点」(1974)で発行審査が厳しくなり、刊行の2年後民國67年(1978)には、報道検閲のできない野党出版物増加を警戒して雑誌申請凍結が実施され、結果国策に合致した内容が必須の雑誌刊行条件になる。同要点は民國69(1980)年に改訂されて文化工作執行小組は各警備分区の指揮官を上に乗ることになった。

加えて民國61(1972)年「台湾地区省市一縣文化工作處理要点(修正)」で民族意識の高揚及び中華文化復興運動の線ですらに純化することが明示された。

文芸面では外省第一世代の作家から台湾出身の作家に移りつつある時期で、加えて郷

土文学が盛んになる時期であるが、救国団系での文芸座談では作家は民族精神の発揚、三民主義重視、反共国策との協調が務めであると政府幹部により言われている。

(3) 児童文学では創刊の10年ほど前から雑誌や新聞での発表の場が拡大していた。一方で教科書の編纂が編訳館に集約されるなど教育内容の統制強化が行われた。

(4) 救国団が中等教育に関与したこととして以下のことが挙げられる。

救国団は既に高級中学~大学の年代に対して、軍事訓練強化とともに学校現場に大きく入り込む。各校の救国団分部は、訓練にとどまらず、校誌の発行にも関与していた。一方民國57(1968)年義務教育延長により中学が義務教育化されるが、高級中学や大学のように教科化する『三民主義』や軍事訓練などによる直接の思想教育はまだ入り込めず、方法を見出す必要があった。

(5) 創刊期の『幼獅少年』の性格

創刊時、記事は総花的である。文学は専門の作家は、大陸出身のベテランが、彼らの若い時期の経験を綴って、大陸の生活を台湾の青年に伝える意図がある。時事解説は反共復国、共産党の悪政といったスタンスは当然のこと、かなり専門的な用語もまじえている。また蔣経国自身の文章も掲載される。

初期数号の分析、これは創刊計画を忠実に引き継いだ時期とみなせるが、ここから読み取れる、中学生に有してほしい見識と、そのために編集側が用意した手段は(1)下のよう整理できる。

共産党政権前の大陸の状況や生活について知っていること(主として大陸出身の作家の大陸での経験についての随筆や大陸を舞台とした小説の掲載)

中華民国政府の意義を共産党支配に苦しむ大陸との対比で理解していること(時事解説や蒋介石に対する哀悼記事、蔣経国の教誨文の掲載)

中国の伝統を継承するものとして、中国文化に対する知識と誇りを有していること(中国の風俗に関する記事、中国の歴代文人、科学者列伝の連載など)

これは(1)の項目に対応させるなら、はA、Fに、はB、C、Eに当たる。

(6) 創刊5年後の記事の性格を整理するとほぼ5年経過した民國70(1981)年の誌面をから、おおむね次のような変化を見て取れる。

時事記事の中で蔣経国総統がかなり重点的に露出させられていることが示すように、当時の政権の宣伝の度合いは高まっている

大陸について伝承文化の記事は、「國劇欣賞」シリーズはあるものの大陸を強く意識した中国文化記事は減少傾向にある。その保存を訴えるものも含めて残ってはいるが、回想

的なものは減少し、この時点で語られる故郷はほぼ台湾である。

学生を含め若い作家の比率が増し、反比例して大陸出身の年代の作家が減少する

読者の反応に、大陸や中華文化関係の記述について好評であるが、しかしそれが

読者一般の代表する反応かは不明

「山地故事」の連載があり原住民への意識が働きだしていること

創刊期は比較的教育部の想定した枠組みに忠実に対応する項目が見いだせるが、この時期には (1) の B,C に対応している。一方 や教孝月行事への記事により、蔣家を頭に戴く中華民国政府の露出に配慮が見える。

(7)

『幼獅少年』は、その刊行意義を中学生の見識を養成するための課外読み物とし、大枠として救国団系の学生向け雑誌の傾向を引継ぎ、専門の作家、学校関係者の執筆したものに、学校現場で創作された作品の発表というものを加えている。

中国語識字人口の拡大に読み物が追い付かず、文芸作品では多くの青少年の読者はそれまで児童読み物のあとは大人向けの通俗小説を入りにしたが、中学相応のものが必要になり、その機能を果たし、加えて様々な行事を救国団が企画し、参加者にも文を書かせ、投稿を掲載するなど、写作練習の機会を与える機能も持った。新聞雑誌の副刊などで小学生の発表の機会是比较的豊かであったが、中学生段階というのは意外とチャンスに乏しい。所謂感想欄「読者函」、作品投稿欄の「青青天地」ショートコントの「哈哈鏡」やアンケート、時にテーマを絞った徴文企画や絵画の募集も見られる。

さらに中学教員の指導の下で故郷に関する記事を中学生にまとめさせて掲載している。また作者、読者に編集者を加えた交流会も実施された。

(8) 以上のように『幼獅少年』は、救国団の精神や作家群と協調しながら、新たに生まれた中学生世代に読み物を提供し、作品の掲載の場を提供した。しかし、掲載記事は当然新聞局の管轄する規制の枠内で考えられ、雑誌を通して身につかせようとした「見識」は中華民国の政策、自由中国の意義、長い歴史を持つ中華文化の評価という当時の政府の教育方針に対応していた。

その上救国団出版物の特徴的な流布形態として、『幼獅少年』は学校におかれ、単純に読み物を提供するだけでなく、多くの少年に『幼獅』に掲載されるような政治的な記事の予備段階として、国際情勢・政策の情報伝達機能も併せ持ったものと言える。

(9) 『幼獅少年』刊行と前後して、救国団

は各地で重点を文芸に置いた総合誌を発行し始め各学校との関係をさらに強化し、また中学校の一部では、古くからある中学(高級中学)校誌(この時期各校分部が編集に関与していた)にならい、校誌の発行を始めるが、その体裁は初期『幼獅少年』と類似しており、各場面で影響を与えたと判断できる。

[インパクト]

一般に台湾の文學研究上、救国団という国民党関連団体に出自を持つ雑誌は、文芸誌『幼獅文芸』に焦点が置かれ、他の救国団出版物(のちに関係出版物は幼獅文化出版公司に移される)『幼獅(月刊)』『幼獅學刊』などは関心を払われなかった。『幼獅少年』も、作家研究、作品研究の一環で初掲誌として引かれることはあっても、雑誌全体の分析は蔑ろにされている。今回この初期の分析を行ったことは、これ以後の校刊への影響や、救国団支部発行の青年誌との比較研究を進めるうえで一定の資料を提示しえた。

[今後の展望]

救国団(その系列の幼獅出版事業公司)は、中学生向けに『幼獅少年』を編集することで、中学生が認識しなければならないものを伝え、一方で校内の軍事訓練を管理する名目で校内に入り込み、また休暇中も各種行事を企画することで現役の中高生をその組織に近づけた。

既にこの手法は高校ではある程度成功していたものだったとみなせる。例えば高等学校の校誌は、これらは多くの文芸を主とした在校生作品を載せることを主眼にしているが、かなりながく救国団の各校分部が差配していた。更に全国の救国団支部は児童、高校生向けに地名を冠した「児童」「青年」をそれぞれ発行し始めた。更に義務教育開始により各地に設置された国民中学は、ほどなく校誌を始めるが、その初期にあつては、誌面のレイアウトや企画はかなり『幼獅少年』に類似している点が見られる。

しかしながら、この面を掘り下げた調査はほとんどない。それは資料の散逸が著しいからである。2014年度筆者は台南で予備調査を開始したが、救国団台南市部は既に発行して通巻200号を超える『南市青年』を十分に保存せず、投稿者となる学校もほぼ生徒に配布するだけで残さない。加えて中学の校誌は、それに対する補助が打ち切られたことを主たる理由として多くのものが廃刊、停刊状態になり、バックナンバーを系統的に保存している学校はほぼ無い状況である。しかし、予備調査した幾つかの学校は関係者の協力を得てその一部を収集することが可能であったので、時間をとって当たることによって、研究資料に耐える規模の資料収集は可能と考えられる。これを加えることで、少年誌の全体的な機能分担が明らかにできると考えている。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

1) 高橋明郎、台湾の政治・社会と少年雑誌編集 民国 65~70 年代の『幼獅少年』を例に (第一部) 『香川大学経済論叢』、無、87 巻、4 号 2015, pp.83-102,

2) 高橋明郎、『幼獅少年』初期の編集 民国 70 年度誌面の分析、『香川大学経済論叢』、無、86 巻、4 号 2014, pp.1-25, <http://shark.lib.kagawa-u.ac.jp/kuir/metad ata/27574>

3) 高橋明郎、『幼獅少年』創刊期の記事と作家たち、『香川大学経済論叢』、無、85 巻 4、2013, pp.5-29,

<http://shark.lib.kagawa-u.ac.jp/kuir/metad ata/27542>

4) 高橋明郎、『幼獅少年』創刊の時代、『香川大学経済論叢』、無、84 巻 4 号、2012, pp.17-39, <http://shark.lib.kagawa-u.ac.jp/kuir/meta data/27524>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 明郎 (TAKAHASHI AKIO) 香川大学経済学部教授

研究者番号: 60197126